

報 告

看護大学生のボランティア活動

—老人大学アンケート結果から考える地域高齢者の期待と今後の課題—

神 崎 匠 世¹

抄 録

地域貢献は大学の基本的役割として位置づけられ、知識の付与、知的・応用的能力の発展とその成果を提供し、社会に寄与することが求められている。本報告では、近隣公民館における看護大学生のボランティア活動の報告と、地域高齢者を対象とした大学への期待に関する調査結果をもとに、地域貢献活動の今後の課題について検討した。公民館開講の老人大学を受講している65歳以上の高齢者を対象としたアンケート調査から、大学へ期待することとして「学生との交流」が最も多かった。学生はボランティア活動を通して地域住民と交流を深め、地域貢献への達成感、地域への愛着や関心が高まっていることが推察された。今後は、大学と地域住民が互いに交流する機会を設け、学生のボランティアへの関心を高める支援が必要であり、参加学生が主体性を持ち積極的に誘い合えるような雰囲気づくりが重要である。

Key words: 看護大学生 ボランティア活動 地域高齢者

1. はじめに

2006年の教育基本法の改正により地域貢献は大学の基本的役割として位置づけられ、知識の付与、知的・応用的能力の発展とその成果を提供し、社会に寄与することが求められている。法的な位置づけとともに、文部科学省は2012年より大学と地域社会との連携による「地（知の拠点整備事業）」を推進¹⁾し、各大学では多様な取り組みが行われている。中でも学生参加型の地域貢献として、自治体との連携や大学間が連携した食育推進活動^{2), 3)}、介護予防のボランティア教育システムの構築⁴⁾などが報告されている。

広島都市学園大学（以下、本学とする）においても、市立中央図書館との連携事業として地域住民への大学図書館の開放とともに、認知症の啓発や交流の場づくりなどの取り組みが行われている⁵⁻⁷⁾。

看護大学生（以下、学生とする）である本学看護学科保健師課程の学生は、近隣公民館においてボランティア活動に取り組んでいる。今回はこの活動内容の報告と、公民館が開講している老人大学を受講する高齢者を対象とした本学への期待に関する調査結果をもとに、地域貢献活動の今後の課題について検討する。

2. 方法

2.1 公民館と学生のボランティア活動について

1) 公民館の位置づけと公民館まつり

公民館は、社会教育法に基づき市町村その他一定

受稿：2021年1月29日 受理：2021年7月30日

¹ 広島都市学園大学健康科学部看護学科

〒734-0014 広島市南区字品西5丁目13-18

区域内の住民のために、実際生活に即する教育、学術及び文化に関する各種の事業を行い、もって住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することを目的とし、市町村によって設置されている⁸⁾。公民館まつりは、本学近隣の公民館が主催する事業の一つであり社会参画活動の推進事業として年1回開催され、公民館を拠点に活動するグループ、地域団体による書道・華道・絵画・陶芸などの活動の発表やバザーなどを通じて学習成果の活用を支援している。

2) 公民館長による講義と学生のボランティア活動

本学看護学科保健師課程を選択している学生約20名は、2年次に「公衆衛生看護学一アセスメント展開」の1コマ内(45分)で、公民館の見学、館長より公民館の位置づけや役割、主催事業計画および利用状況等について受講した。これは地域の社会教育施設である公民館の活動内容を学ぶことによって、学生が地域をアセスメントし顕在的・潜在的健康課題に気づき、より良い保健活動についての学びにつなげることを目的としている。そして4年次に「公衆衛生看護管理論」内の1コマで、公民館を利用する住民の活動の実際にふれることで地域の健康課題の解決に向けた考察に役立てることを目的とし、農産物バザーや軽食、喫茶コーナー等の補助を行うボランティアスタッフとして公民館まつりに参加し地域住民との交流を図った。

2.2 公民館主催の老人大学受講者を対象としたアンケート調査

高齢者の生きがいづくり・ふれあいの場として、先述の公民館が参加者を募集し開講する老人大学を受講している近隣在住の65歳以上の高齢者を対象にアンケート調査を実施した。老人大学開講日である平成28年2月26日にアンケート用紙を配布回収し、分析対象は同意の得られた79名のうち回答の欠損等を除いた50名とした(有効回答率63.3%)。調査内容は、性別、年齢区分、本学の認知の有無、本学に期待することとし、アンケートは無記名とした。依頼文に調査への協力は自由意志であること、得られたデータは統計的に処理し個人が特定されることはないこと、研究以外の目的には使用しないこ

と、アンケートの回答および提出をもって同意を得るものとする旨を記載した。本調査の実施にあたっては本学倫理審査委員会の承認を得た(承認番号2015025)。

分析方法は、性別、年齢区分、本学の認知度については単純集計とし、本学に期待することについては自由記述とし、質的帰納的に分析した。本学への期待、要望について述べられている箇所を抜き出して、内容の類似性をもとに分類しカテゴリ化した。

3. 結果

3.1 アンケート調査結果について

アンケート結果による対象者の属性と本学の認知の有無についてはTable 1に示す。本学の認知の有無について、「知っている」92.0%であり、近隣に住む高齢者にとって認知度は高いことがわかった。

Table 1 対象者の属性と本学の認知の有無について
n=50

	項目	人 (%)
性別	男性	14 (28.0)
	女性	36 (72.0)
年齢区分	65～69歳	6 (12.0)
	70～74歳	18 (36.0)
	75～79歳	13 (26.0)
	80～84歳	8 (16.0)
	85歳以上	5 (10.0)
本学の認知の有無	知っている	46 (92.0)
	知らない	4 (8.0)

本学に期待することについての自由記述では、「地域住民と学生との交流」、「地域における大学の知名度や活動内容のPR」、「学生の地域活動参加」、「公開講座開催回数の増加と内容の工夫」、「保健・医療に携わる人材育成」、「地域への大学施設の開放」が抽出された。「地域住民と学生との交流」への期待が最も多く、次いで「地域における大学の知名度や活動内容のPR」であった(Table 2)。

Table 2 本学に期待すること

カテゴリ	記述件数
地域住民と学生との交流	6
地域における大学の知名度や活動内容のPR	5
学生の地域活動参加	4
公開講座開催回数の増加と内容の工夫	3
保健・医療に携わる人材育成	2
地域への大学施設の開放	1

3.2 学生のボランティア活動内容

2日間開催される公民館まつりにおいて、喫茶、うどん等軽食、農産物バザー、それぞれのコーナーにわかれボランティアスタッフとして参加した。午前中に手順説明を受けた学生は、午後担当の学生に申し送りをするなど、スムーズに活動ができるように連携を図った。活動終了後も、率先して後片付けや清掃に取り組み、参加している地域住民とも交流を深めていた (Fig.1) (Fig.2)。活動終了後の学生からは「地域住民と一緒に活動して楽しかった。」、「助かったよ」と言われ嬉しかった。、「また参加したい。」などの言葉が聞かれた。公民館館長および参加スタッフからは、「物品を運ぶような力仕事は特に助かった。」、「後片付けなど自分たちから気付いて行動してくれた。」、「雰囲気明るくなる。他の行事にも参加してほしい。」等の言葉があった。



Fig.1 公民館まつりで住民と交流する様子



Fig.2 農産物バザーを手伝う様子

4. 考察

今回調査対象であった地域高齢者が本学に対して期待していることとして、「学生との交流」が多く

挙げられた。これまでの大学地域連携に関する取り組みにおいても、学生の参画による事業への住民参加率の上昇がみられること³⁾や、住民と学生や教員との交流の広がり地域づくりにつながることが報告⁹⁾されている。また、学生側にとっても地域貢献にかかわることへの達成感¹⁰⁾、地域貢献に携わったことによる学生本来の学習効果²⁾が示唆されている。本学学生においても、ボランティア活動を通して地域住民と交流を深めており、活動終了後の言葉にあるように、地域貢献への達成感、地域への愛着や関心が高まっていることが推察された。今回ボランティア活動に参加した保健師課程の学生は、日々地域住民の健康と生活を守る公衆衛生看護の視点を学んでいる。地域のより良い健康状態を実現するため、地域全体の特徴をとらえ顕在的・潜在的健康課題を見出す必要がある。そのためには地域住民や住民組織などとの関係構築が重要となる。地域住民との交流を通して、その実際を学ぶ貴重な機会となり意義があったと考える。

アンケート結果によると本学の認知度は高いことが示されたが、一方本学に期待することとして、「地域における大学の知名度や活動内容のPR」が多く求められていた。このことから、身近な場所に大学が存在していることは認識しているが、どのような教育方針を持ちどのような学生を育てているのか、どんな専門性を持った教員がいるのか等、大学が持つ力や機能を地域に向けて十分に発信できていないことが考えられた。文部科学省による調査結果¹¹⁾からも、地域社会に対する大学の貢献の取り組み状況について、「公開講座の実施」や「教員の外部派遣」など9割以上の高い割合に対して、「教育の最新動向等の情報発信」は5割程度にとどまっていることが示されている。地域貢献が大学の基本的役割となった今、それぞれの大学が進めている取り組みを、地域住民および行政、他大学と共有するためには取り組みの「見える化」が求められている¹²⁾。本学看護学科に所属する教員や学生が、住民の保健行動、健康支援等に関する情報発信を行うことは実現可能と思われる。地域貢献活動の体験から大学での学びの目的意識が好転し、各専門職としての洞察力を深める支援の必要性¹³⁾が示されているように、本学

が目指す地域社会に寄与することができる医療専門職の育成に地域貢献活動は重要である。学生の地域活動を継続するとともに互いに交流する機会を設け、地域のニーズと大学側の認識にずれが生じないように、大学の知の拠点としての役割を発揮できるような取り組みを模索していく必要がある。

5. 今後の課題

公民館まつりに参加している主なスタッフは高齢者であり、「年々身体的な負担が重なってきた」、「事前の準備・設営にも体力が必要。若い人の協力がほしい」等の声が寄せられた。次年度以降、当日のボランティアスタッフとしての参加だけではなく、事前の設営準備等への協力も視野に入れているが、そのためには新たにボランティア参加者の枠を広げることへの課題がある。学生のやらされ感や負担とならず、参加学生が主体性を持ち積極的に誘い合えるような雰囲気づくりが必要と考える。また、参加学生および参加住民を対象にしたアンケート調査などの評価を実施し、その効果や課題についての検討を十分行う必要がある。

文 献

- 1) 長田進. 地域貢献について大学が果たす役割についての一考察. 慶應義塾大学日吉紀要 社会科学 2015 ; 26 : 17-28.
- 2) 山口忍, 鶴見三代子, 長澤ゆかり, 本村美和, 沼口知恵子, 綾部明江, 他. 大学と阿見町との食育活動推進にむけた取り組み—地域貢献活動の一環として—. 茨城県立医療大学紀要 2015 ; 20 : 131-136.
- 3) 近江雅代, 境田靖子, 青木るみ子, 辻澤利行, 秋房住郎, 日高勝美, 他. 大学連携事業としての地域密着型食育活動の展開—3年間の取組ならびに今後の課題—. 西南女学院大学紀要 2018 ; 22 : 91-99.
- 4) 芝田ゆかり, 高橋直美, 名和めぐみ, 北端恵子. 2015年度教育改革推進事業 介護予防体操作成プロジェクト報告—地域と大学が連携した地域基盤型のボランティア教育システム—. 朝日大学保健医療学部看護学科紀要 2017 ; 3 : 47-54.
- 5) 片山智恵美, 谷川良博, 川畑なみ, 富樫誠二. 大学図書館と公共図書館の連携による地域貢献. 健康科学と人間形成 2018 ; 4(1) : 65-70.
- 6) 谷川良博, 片山智恵美, 松本昌也, 野田笑里, 宅野春香, 沖田将史. 「Dementia -Friendly」を志向する図書館サービスの課題—図書館職員と作業療法士を中心とした協働の経過から—. 健康科学と人間形成 2019 ; 5(1) : 49-57.
- 7) 谷川良博, 片山智恵美, 山田有夏. 認知症にやさしい図書館の取り組みの進展. 健康科学と人間形成 2020 ; 6(1) : 55-60.
- 8) 文部科学省生涯学習政策局社会教育課. 公民館. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2010/09/13/1292569_1.pdf (2021/4/7 参照)
- 9) 中川康江, 田中響, 近田敬子, 土居裕美子. 大学と連携・協働して活動する地域の健康づくりリーダーの意識. 日本看護学会論文集 ヘルスプロモーション 2020 ; 50 : 43-46.
- 10) 森崎由佳, 前川真由美. 学生主体の学習としての地域貢献活動の教育的効果(第一報)—地域貢献プログラム「健康セミナー」を企画運営した看護学生の変化—. 日本看護学会論文集 老年看護 2013 ; 43 : 138-141.
- 11) 文部科学省委託調査. 平成 29 年度開かれた大学づくりに関する調査研究. https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/chousa/1405977.htm (2020/2/8 参照)
- 12) 内閣府経済社会総合研究所. 大学等の知と人材を活用した持続可能な地方の創生に関する研究会報告書. 2016. <http://www.esri.go.jp/jp/prj/hou/hou074/hou74.pdf> (2020/2/8 参照)
- 13) 棚田裕二, 岡本直行, 栗本一美, 八尋茂樹, 増井香名子, 久恒拓也, 他. 新見公立大学学生における地域貢献活動に関する調査. 新見公立大学紀要 2019 ; 40 : 219-222.

Volunteering Activities of Nursing University Students: Understanding Community Elderly Expectations and Future Issues Based on Responses to Old-Age-University Questionnaires

Naruyo KANZAKI¹

Abstract

Community contribution, a fundamental role of universities, is realized through providing knowledge and developing intellectual and applied abilities. This study examines community contribution activities based on volunteer activities of nursing university students at nearby community centers and survey results targeting the community elderly. A questionnaire survey was carried out with community elderlies aged 65 years and older who are attending a university for the elderly organized by the community centers. The most cited expectation from universities was “interaction with students.” Students built relationships with local residents through volunteer activities. Students’ sense of accomplishment was found to increase as a result of contributing to the community. Likewise, their attachment to and interest in the community also increased.

It is necessary to provide opportunities for universities and local residents to interact. Furthermore, it is important to provide a conducive environment for students to take initiative and actively participate in the community, which will raise their interest in volunteering.

Key words: nursing university students, volunteer activities, community elderly

¹ Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Hiroshima Cosmopolitan University
5-13-18 Ujinanishi, Minami-ku, Hiroshima 734-0014, Japan